

ワークショップを終えて

今回の「2012年度京都大学・南京大学社会学・人類学ワークショップ」は2011年度に引き続き、南京大学で行われた二度目の学術交流である。参加した日中8名の若手研究者は歴史学、哲学、地理学、社会学、人類学など各分野の知識を総合して、素晴らしい研究成果を報告した。また、南京大学社会学部の張玉林教授、朱安新准教授、人類学研究所の范可教授、楊徳叡准教授、褚建芳准教授、楊渝東助教にもご参加いただき、各報告についてのコメントなどをお寄せいただけた。この「ワークショップを終えて」では、まず報告後の質疑応答の部分をまとめておきたい。

まず、中山大将氏の「移民/植民研究から＜跨境＞研究へーサハリン島から見た北東アジア」についてであるが、今回の報告では、中山氏は「跨境」という概念を提示した。日本の戦後における人口移動研究における問題を分析した上で、移動を伴わない越境を跨境と定義し、サハリン残留日本人が跨境者の典型例と述べた。楊渝東先生は報告後、「北東アジア」について質問した。それに対する中山氏の回答は以下の通りである。「私が北東アジアという時、主にロシア極東、中国東北部、日本の北海道、そしてロシアのサハリンを中心に考えている。なぜかという、そこは移住者が近代的な社会を作った地域であり、もともとの伝統的な社会が発展した地域とは状況が異なっているからである。この意味において、私は北東アジアという概念を地理区分として使っている。」

次に、櫻田涼子氏の「南洋華僑における知識と華字紙の役割について」と王華氏の「麦粒から青菜までー江蘇省永忠村の社会変遷ー」、傅琦氏の「ローカライズする空間ー大行と亳州の相互構築ー」という三つの報告について、楊徳叡准教授は現代人類学研究における不可避な視点、即ちマス・メディアの視点から着目している点で共通していると評した。櫻田氏は南洋華僑を通して、現地の華僑がどのように自分の文化とアイデンティティを維持し広げたのかを論じた。また王華氏は村のラジオを巡る状況の変化から、社会変化のより深い原因を探求した。傅琦氏は直接メディアを対象としていないが、亳州という薬材市場の事例を通して空間存在の表象的な意味を提示した。

福谷彬氏の「朱熹の社会法についてー朱熹の哲学及びその農村政策との関連ー」と李徳営氏の「済寧市石炭採掘の影響および採炭区農民の抗争」については、研究対象時期が異なるが、宋代から今日までの中国社会に一貫して存在している問題、すなわち官民の関係の問題を明示したと楊徳叡准教授がコメントした。

平井芽阿里氏の報告「聖なる森の民俗学ー沖縄を事例としてー」に対して、朱安新先生は、「中国には、このような聖なる森に対する信仰のようなものがないため、大変興味深い。あなたの発表では、ただの森が聖なる空間になるのは、祈願を行うからだという説明だが、もっと具体的に聞かせて欲しい。」と質問を寄せた。それに対して、平井氏の回答は「ただの森、言い換えれば人工的に管理された森が、聖なる森として、神々のすまう森と化すのは、何年も、何十年も、あるいは何百年もの"祈りの蓄積"にあるのではないかと考えている。」

神々の前では、同じ祈願を同じ形式で、昔と同じように行わなければならないといったような、変化をタブーとする考え方が常に働いている。このような考えを背景とし、祈りという行為を同じように繰り返す事によって、祈りが蓄積された森としての聖なる森となるのではと考えている。」というものであった。

最後に、胡艶華氏の「儀式の変遷とアイデンティティ危機—湖北王村葬送儀礼を例として—」については、土葬から火葬への儀式の変遷についての研究がまだ少ないので、その変遷過程の分析から何が提起され得るのか大変興味深く、非常に研究価値があると楊徳叡先生が評価した。

以上が今回のワークショップの質疑応答の概要である。

南京大学を卒業し、現在は京都大学に在籍する一学徒として、私は「京都大学・南京大学社会学人類学ワークショップ」に関わりながら人生の重要な時期を過ごしてきた。中山氏と福谷氏が序言で述べたように、今回のワークショップが計画通りに行われたこと自体にすでに大きな意義がある。最後に、南京大学側がインターネット上に掲載した今回のワークショップ開催についての記事から一文を引用して、拙文を結びたい。

国格信仰需堅守、思想交流無止境

*(国家の体面や尊厳は堅守すべきだが、思想交流はとどまるところを知らない) **

来年の開催を心から期待している。

2012年12月1日

巫覡 京都にて

* <http://sociology.nju.edu.cn/index.php?module=news&action=detail&id=444>。

尾声

此次的 2012 年度“南京大学—京都大学社会学人类学研究生论坛”是继 2011 年度之后，第二次于南京大学召开的学术交流。与会的八位博士综合了历史学、哲学、地理学、社会学、人类学等各门学科的知识，为我们呈现了一次丰盛的知识大宴。在此次的论坛上，南京大学社会学专业张玉林老师、朱安新老师以及人类学专业范可老师、杨德睿老师、褚建芳老师、杨渝东老师亲临现场，为我们进行了精彩点评。在尾声部分，我们想就现场提问部分进行一下小结。

首先关于中山大将博士的《从移民—殖民研究到“跨境”研究：从萨哈林岛看东北亚》报告。报告中，中山博士提出了“跨境”这一概念。在总结了日本战后人口移动研究中存在的问题之后，他将“不伴随移动而产生的越境”定义为“跨境”，而“跨境”者最为典型的例子则是萨哈林残留日本人。对于中山博士的报告，杨渝东老师就“东北亚”这一概念在其研究中是如何定义的提出了问题。对此，中山博士论述到，他所定义的“东北亚”主要包括俄罗斯的远东、中国东北、日本北海道还有萨哈林岛，这些地区都属于由移居者所构成的社会，与原本就存在的传统社会不同，从这个意义上，他进行了地理区分。

其次，关于樱田凉子博士的《报纸与南洋华侨：围绕着“知识”的问题》、王华博士的《从麦粒到菜叶：江苏永忠村的社会变迁》以及傅琦同学的《空间与地方：大行与亳州药都地位的互构》三篇报告。杨德睿老师认为这三篇都涉及到现代人类学研究不可回避的一个重要着眼点，即大众传媒。在樱田博士的报告中，她借助南洋华侨所发行的报纸来了解当地华侨是通过怎样的方式维持和传播自己的文化。王华博士则通过广播的变化，探寻江苏永忠村社会变迁的深层原因。而傅琦的报告中虽没有直接表明传媒，但对于亳州药都这样一个市场形象的建立，让我们了解到如今这样的时代，空间的存在与市场形象之间的紧密联系。

关于福谷同学的《关于朱熹的社仓法——朱熹的哲学及其农村政策关联》及李德营同学的《济宁市煤炭开采的影响以及采煤区农民的抗争》两篇报告，杨德睿老师认为它们都体现出中国社会自宋代以来一直存在的老问题，即官民关系，而这一关系至今还没有得到解决。

平井芽阿里博士的发言题目为《神圣的森林民俗学考：以日本冲绳为例》。朱安新老师在听完报告后，提出了以下问题。“在中国，我们没有对森林的信仰，因此我觉得你的发言很有意思。在你的发言中，你认为森林能够成为神圣的空间，是因为有人对其进行祝愿。对此我希望得到更具体地解释。”平井博士的回答为：“普通的森林，换言之经过人工管理的森林，之所以能够成为神圣的森林，拥有神灵的森林，我认为正是因为数十年、数百年“祝愿的累积”。在神灵的面前，同样的祝愿通过同样的方式，这种对于变化持禁忌态度的思想一直存在。以这种思想为背景，通过不断重复祈祷这一行为，累积着祝愿的神圣森林就实现了。”

最后关于胡艳华同学的《民间仪式记忆与认同危机——以湖北王村为例》报告，杨德睿老师认为目前学术界对于土葬转变到火葬的研究还很少，因此很有价值。

以上是这次论坛提问部分的小结。作为一名从南京大学毕业，目前正在京都大学求学的学生，“南京大学—京都大学社会学人类学研究生论坛”也伴随我走过人生中一段重要的历程。

正如中山和福谷在前言中所说，这次的论坛能够在政治形势异常严峻之时如期召开，本身就具有很多重要的意义。引用南京大学社会学系对本次论坛召开评价中的一句来结束这篇拙文——“国格信仰需坚守，思想交流无止境。”*衷心期待论坛来年的召开。

巫靓

2012年12月1日 于京都

* 请参考 <http://sociology.nju.edu.cn/index.php?module=news&action=detail&id=444>。